

2017年度(2017年7月1日～2018年6月30日)事業報告

□この1年

経済の活発化にともない、とりわけヴィエンチャンでは「教育熱」がますます高まっています。至る所で学校が新設され、月謝が200ドル近い私立学校でも、生活を切り詰めても「良い学校」に子どもを入れることに親の躊躇はありません。一方、公立小学校は子どもたちが減り、閉鎖に追い込まれる学校もあるといます。その「良い学校」とは、英語、中国語、コンピューターを教えるなど実利性が高く、個の「豊かな生活」に直結する技術が一番とする学校です。親が子どもの将来を思い、実利を大切にすることは分かりますが、以前のように、社会に「みんな」が良くなるとういう雰囲気が減っていることは気になります。というのも、読書推進などの活動が、ラオスの人々によって担われるようになることを念頭におき、私たちは活動方針を決めてきましたが、この担い手が、個の豊かさを追求する社会の流れの中で、見つけにくくなっています。ヴィエンチャン近郊の中等学校で、図書館建設の要請を校長から1時間ほど受けた後、教室を出ると目の前に「library」と表示の建物。結果として校長が「図書館」がどの様なものか、理解していないことを思い知らされました。(主に教科書倉庫として使われている)建物としての図書館はあっても、機能としての図書館は認識されていません。昨今のラオスでは「教育」という言葉も同じではないかと、案じられます。社会環境が変化し続ける中、ごく普通の人々が、読書のなかで自分の世界を広げ、豊かな時間を持つことができるようになってほしいと、私たちは活動を今年も展開しました。

活動の課題、重点的取り組み

今年も、これまで会が継続してきた様々な活動の幹となる「読書推進活動」「出版プロジェクト」「子どもセンタープロジェクト」を中心に活動を展開しました。4年間にわたりJICAと共同して取り組んできた学校図書室の整備に加え、地域に文庫を設け、村教育開発委員会はじめ、村の人々が中心になって支えていく仕組みをつくる「学校図書室の地域へ展開事業」が最終年度となり、プロジェクトの成果と今後の課題は何であるかを検証する活動がおこなわれました。加えて、あらたに開始を予定している中等学校における図書館開設プロジェクトの立案においても、ラオス事務所と事業における計画立案、実施、評価など、PDCAサイクルについて、共同・共有を強めることができました。

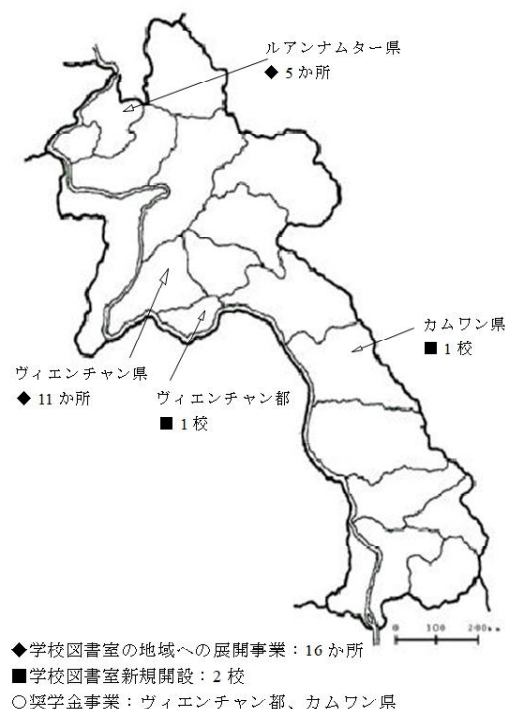
資金調達においては、定期的な募金活動を継続することで、成果をもたらすことができました。多くの皆さまに支援、募金をいただき、支えていただけること、心から感謝にたえません。

課題であった、ラオス政府との活動覚書MoUの契約締結について、準備を進め、目途がつくところまでこぎ着けましたが、完了しないために、活動に制約があるなど組織運営に問題を残しました。また、慢性的な人手不足により、計画にあっても、実施できなかった計画も残り、来年度での改善が必要です。

成果

皆さまのご支援の結果、今年度末までの累計で、ラオス語図書 220種類 901,255冊(図書185/紙芝居19/教科書類6/ニュースレター10)を現地出版し、ラオスの小中高校10,577校(小学校8,849校、中学校1,728校)のうち、312カ所で図書室(うち16カ所は地域文庫)を開設し、2,732校に図書セットを配付。2,318校でフォローをしました。また、これまで全国14カ所の子どもセンターの運営を支援し、活動の活性化を支援しています。

2017年度 事業対象地域図



プロジェクト運営

<計画> 当会は、ラオスの子ども達の教育環境を改善する働きかけとして、今期も引き続き、

1. 子どもたちに読書の楽しさを伝える読書推進活動
 2. 子どもたちに良質な本を提供する出版活動
 3. 子どもたちの居場所と音楽や創作表現活動の機会を提供する「子どもセンター」運営支援
- さらに日本において、ラオスの子どもたちの様子を紹介する訪問活動、市民が参加しやすい国際協力活動としてのラオス語絵本プロジェクトなどを展開する。

I 読書推進活動

<計画> 今年度も引き続きこれまで開設支援をしてきた学校図書室を中心に、フォローアップをおこなう。読書習慣の確実な定着を図り、読書推進の担い手育成を続け、自立的で活発な学校図書活動の安定を目指す。さらに、この3年間取り組んできた学校を拠点としながら、保護者や地域住民を積極的に巻き込むことで、地域に根ざした自主的、持続的な図書活動の展開を継続してすすめてゆく。

I-1. 学校図書室の地域への展開事業（2014年2月～2018年1月）

<計画> 4年間にわたる事業の最終年度として、ルアンナムター県、ヴィエンチャン県の6郡において、小中学校16校の教員、校長、児童生徒、地域住民を対象とし、地域に根ざした図書活動の展開を図る。保護者をはじめとした地域住民を図書ボランティアとしてトレーニングし、地域文庫を設置し、図書推進の拠点を地域に拡げる事業。

・開設済みの学校図書室・地域文庫のフォローアップをおこなう

・草の根技術協力事業としての終了時評価を実施する

・第2フェーズ実施のための調査・検討・申請をおこなう

実施にあたっては、前年度実施での課題を改善し、スケジュールを含めた計画をしっかりとて、現場に行く前の準備をきちんとおこなう。また、現場の担当者が変更されたところには、研修やサポートを繰り返しおこなう。

<実施>

4年間にわたる事業の終了にあたり評価をおこなった。事業地16カ所を回り、開設した各学校図書室と地域文庫の運営がどんな状態か、運営の記録を確認し、質問紙を用いて教員や村教育開発委員会の運営担当者や校長、村長、利用者である子ども達と村人達、総勢427人にインタビューを実施した。聞き取りをまとめた結果、学校図書室も地域文庫も、定期的に関われ、それぞれが目標としていたオープン日数を大きく上回っていることが確認出来た。学校図書室は週4日以上が目標のところ、5日以上の学校が81%あり、地域文庫は、月1回以上の目標に対して、月4日以上開放している文庫が81%もあった。地域文庫の開設は、村の大人たちにも読書の機会を提供し、活発なところでは、利用人数も予想を上回っている結果であった。ただ、地域文庫2カ所については、設置した場所が貸主の都合で使えなくなるといった事態により、活動が停滞していた。総合的には、学校図書室はどこも活発に運営がされていることが確認でき、学校図書室と地域文庫の両方を利用できるようになれば、子ども達の利用の機会は増えるという狙いは達成できた。

2018年1月8～9日、国立図書館、国、県、郡の教育担当者22人が参加し、評価会議をおこなった。上に挙げたような成果を確認すると、参加者からは、学校別のデータも見たいという声が上がったり、自分の管轄する地域の良い事例を報告に反映して欲しいと議論がヒートアップする場面があり、多くの人が積極的に参加する会議となった。

評価にあたっては、JICAのガイドラインに従い、客観的な評価をおこなうことが出来た。第2フェーズ実施のための検討をおこなった結果、しばらくは現地での運営状況をフォローアップしつつ、時間をかけて事業を形成し、申請は2019年以降とすることとなった。

（ご支援：JICA国際協力機構 草の根技術協力事業）

I-2. 学校図書室（ハックアーン）の整備

<計画> 小中学校の空き教室を利用して本棚や本を提供し、教員研修をおこない、子ども達が日常的に図書に接する機会をつくる。

・既存学校図書室の活動の停滞化を防ぐためフォローアップを強化する。8カ所程度で活動を実施予定

・新規開設は5カ所程度で実施する

・図書室の運営や読書推進活動のやりかたのビデオを作成する

・図書室活動の広報をおこなう

実施数は、MoUの契約によって、実施場所、箇所数が変わる

<実施>

既存の学校図書室活動のフォローアップ活動は、他事業の業務に追われ現地スタッフに余力がなく、十分な活動を行うことができなかった。過去3年間に開設した図書室56カ所に対し、補充図書セットの送付は実行できた。また、地域文庫に対しての図書補充についても、2017夏募金のご支援により実施することができた。

新規開設は、資金が十分に集まらなかったこととMoUの契約締結が進まなかったことから、2カ所での実施に留まり、これまでの開設累計は312校になった。

以下、開設日・学校名・ご支援者。

2017年12月26～27日 ナーカイ中等学校(カムワン県ナーカイ郡)福岡那の香ライオンズクラブ

2018年2月13～14日 ナーファイ中等学校(ヴィエンチャン都パックグム郡)千葉港ロータリークラブ
開設にあたっては、図書室に必要な図書と本棚、読書用の机椅子を整備。オープン時には読書推進活動のノウハウを提供するセミナーを実施した。

図書室運営に関するビデオの作成は、現地スタッフからの発案で計画していたが、資金と人手不足で実行できなかった。

図書室活動の広報は、下半期に実施したブックフェスティバルのイベントを通じて、広く知らせることができた。また、現地ではフェイスブックを通じた広報が広くおこなわれている。

また、当会の図書室整備事業の評価が広まり、ラオスで活動するNGOや私立学校から、学校に図書室を開設して欲しいとか、図書室用の図書と運営備品のセットを提供して欲しいという依頼が増加してきている。

(ご支援:2016夏募金、2017夏募金、(公財)ベルマーク教育助成財団)

I-3. 中等学校の図書館整備事業

<計画> 進学者が急激に増えている中等学校(中学4年高校3年一貫校)では、生徒数の増加に対し、教育環境および図書室の整備は極めて遅れている。そこで一昨年度実施した**大規模中等学校での図書館整備事業の経験を生かし、ヴィエンチャン県において、新たに中等学校での図書館建設をおこなう。**

<実施>

図書館建設事業準備のため、ヴィエンチャン都2カ所、ヴィエンチャン県5カ所の中等学校において、建築家による建設妥当性の現地調査活動をおこない、環境調査の他、学校当局、郡教育局との事前調整をおこなった。その結果、ヴィエンチャン県3カ所を選定し、3年間をかけて事業を実施する計画とした。

申請書類の準備と外務省民間援助連携室との相談を11月から開始し、現地調査と調整、相談を繰り返しながら、申請書類を作成し、2018年7月に最終版を提出し受理された。事業は次年度開始を予定している。

(日本NGO連携無償資金協力事業に申請)

I-4. ALC図書館(ラオス事務所併設図書館)活動

<計画> 経済成長にともない、都市部では子ども達の生活が多様化した影響から、ALC図書館を利用する子どもが減少している。しかし、スタッフによる積極的な働きかけで、図書館の魅力を増し、来館者を増やすことは可能と考える。読書だけでなく、表現する場として、知る喜びを体験することができる機会を作ることで、満足度を高める工夫をおこなう。スタッフで話し合いながら、これまでの経験を参考に**新アクティビティを開発する。**

<実施>

週6日(平日9時～17時半、土曜9時～13時)の開館を継続。1日平均15人が来館している。来館者の内訳は、夏休み中は中学生43%小学生38%であるが、学期中は中学生60%小学生は26%となっている。図書は一人平均2.4冊を借りているが、図書を借りるのは来館者数の2%に留まる。スタッフが交代でおこなうミニプログラム(折り紙、塗り絵、切り絵、図画工作、手作りゲームなど)は、継続して実施している(開館日の約50%の日で実施)。しかし、スタッフの地方出張が重なる時期は、人手も時間も余裕がなく、臨時閉館とすることも増え、満足度を高めるような企画を十分には作れていない。

一時期、日本人ボランティアが、昼休みに来る中学生向けに、創作アクティビティを実施し非常に人気が高かった。スタッフも一緒に活動し勉強したが、スタッフだけではまだ十分な実施ができない。

8月4日～19日、大学生ボランティア7名が恒例のリコーダー&創作ダンス教室を開催した。学生が入れ替わりながら毎年継続して実施しているため、子ども達には恒例行事として定着しており、特に今年は、楽しみに待っていた子ども達も多かったとのこと。子どもたちに自己表現の楽しさ、協力してひとつのことをやり遂げる大切さを知ってもらうためのプログラムを工夫し、最後には、子どもセンターの子ども達と合同で、保護者を招いた発表会をおこなっている。

II 出版プロジェクト

<計画> ラオスの子ども達にとり、どのような本の提供が意味があるのか、常に把握し、質が高い多様な本を計画的に出版する。新規出版とともに、評価が高い図書の再版、海外の作品の翻訳出版を検討する

- ・新刊1～2タイトル、再版5～6タイトル、計8タイトルの出版をおこなう
- ・基礎的な出版研修(編集、デザイン、グラフィックデザインなど)を、ラオス事務所全スタッフに実施
- ・出版の企画会議を11月と5月の2回実施する
- ・今後の出版計画に反映させるために、既存の学校図書室に図書を届ける際などに、調査フォームを配付し、ニーズ調査をおこなう
- ・昨年、一昨年に実施し好評であった「折り紙ワークショップ」の実施を検討する

<実施>

II-1. 図書・紙芝居 3作品、計7,500部を出版した。(全て再版作品)

当会がこれまでに出版した図書・紙芝居は累計220点 901,255部となった。

	作品名	作者名	出版数	主な支援者
1	『カンパーとピーノイ』第5版 (孤児と小さいお化け)	作)ドゥアンドゥアン ブンヤボン 絵)ヴォンサヴァン	3,000部	冬募金2016 自己資金
2	『カンパーとナンガー』第4版 (孤児と象牙娘)	作)ドゥアンドゥアン ブンヤボン 絵)ヴォンサヴァン	3,000部	冬募金2016 自己資金
3	紙芝居『誰の穴かな』第2版	作・絵) コンサワン シーチャントンティブ	1,500部	学習院女子大学 絵本出版指定募金

1. 2. ラオスで最も有名な民話の一つで、常に図書室の貸出ランキングの上位に入る人気作品。学校からも、図書の委託販売先からも多くリクエストが寄せられるため、再版を決定した。1と2は連続したストーリーとなっており、主人公のカンパーがお化けや象牙娘に助けられながら幸せになるお話。当会では、1990年に出版して以降何度も改訂をおこない、現在の版は2003年に出版したもの。
3. 2003年に、当会がラオスで初めて開催した「紙芝居コンクール」において、大人の部で入賞した作品。2004年に出版した作品の再版。カニとヘビが喧嘩をしているところを通りかかったカメのおじさんが、知恵を使ったやりとりで、仲直りをさせるという、ラオスらしいストーリー。

上記以外に、出版準備をおこなった作品が2つ、これらは期を越えて7月に完成した。全てが再版作品であり、計画していた新刊作品は出版することができなかった。

出版(グラフィック)に関する研修を担当者1名が受けたが、全スタッフが研修を受ける機会は作れなかった。また、計画していた出版の企画会議も実施することができなかった。

ニーズ調査については、図書室利用状況調査の際に、一部実施しているが、フォームを配付するまでには至らなかった。リクエストだと、絵本と学習に役立つようなテキストという声が多く寄せられる。

II-2. 折り紙ワークショップの実施

大好評の折り紙ワークショップの第3弾をカムワン県にて開催。2月8～10日、3月1～3日の2回にわたり合計40名の小学校の先生を対象に当会スタッフが講師となり、ワークショップをおこなった。講師を務めるスタッフのチャンシーは、事務所併設の図書館で日々子ども達を相手にプログラムをおこなっているため、子どもが興味を示すものや間違えやすいポイントなどを熟知している。この経験に基づき先生方を教えているのでわかりやすいと評判である。また、今回は、図書館活動と連動できるテクニックを新しく取り入れた。絵本の中に出

てくる青虫を折り紙で作り、読み聞かせをおこなうというプログラムを紹介。授業で活用できる具体的なテクニックを伝えると、さらにどのように応用できるか、参加者間で話し合いが生まれる。

カムワン県での実施は昨年度に引き続き2回目。県教育スポーツ省からの強い要請があり、引き続き実施することになった。同局が全面協力し、サポートするスタッフも継続しており、今後は、県スタッフが講師を務められるようトレーニングすることも検討している。

(ご支援：キヤノン株式会社)

Ⅲ 子どもセンター(CCC/CEC)

<計画> 子どもたちが自己表現活動の場として、1994年にラオス初の子ども文化センター(CCC)が開設されて以降、活動は社会に定着し、現在では全都県の約39カ所で子どもセンターが設置されている。しかし、社会の変化にともない、子どもたちのニーズが多様化することで、来館者が減少し、活動が停滞している館が増えている。各地のセンターの自立を促す方向性から、当会はセンター個別の支援をこれまで減らしてきたが、子どもセンターの活動再建のために、**一部の講座支援を復活させる必要がある**と判断した。

・当会スタッフが2~3カ所の子どもセンターを訪問し、各センターの活動状況や課題の把握に努める

・ヴィエンチャン都またはヴィエンチャン県のセンターで、1~2講座の運営費のサポートを試行する

<実施>

ヴィエンチャン都またはヴィエンチャン県のセンターで、1~2講座の運営費をサポートし、運営立て直しのモデルケースとして試行する計画であったが、どのような講座のサポートをするのかセンター側との話し合いが進まなかった。一方で、サイヤブリー県パクライ郡の子どもセンターから活動支援の要請があり、具体的な計画書を提出してきたことから、今年度の支援はパクライ子どもセンターへおこなった。1月28日~2月4日の学校が試験休みになる時期に、子ども達がセンターに来て、様々な創作活動に触れる機会を提供した。ラオス事務所スタッフ2名も活動の様子を把握するために、同センターを訪問した。

Ⅳ 受託事業

<計画> 2012年より協力してきた**高校生(後期中等学生)対象の奨学金事業を継続する**。奨学金の受給者は、ヴィエンチャン都150名、カムワン県150名の300名の予定。事業の実施にともなう数百人の高校生との面談は、現実の生徒の困難を把握する手立てとなっている。

<実施>

Ⅳ-1. 高校生対象の奨学金事業

タイのThe Siam Cement Public Co., Ltd. (SCG)より、6年目の受託。高校生(中等学校5年~7年生)が対象で、教育局と協力し、ヴィエンチャン都全域及びカムワン県4郡にあるすべての公立中学高校に願書を配布。書類選考の後、審査員が直接学校や家を訪問し面接をおこなった。ヴィエンチャン都160人、カムワン県140名、計300名の奨学生を決定。

1年間の奨学金を提供した。

毎年、奨学生の人数が増えており、金額も通常奨学金と特別支援金の2タイプの支給があり、事務作業が煩雑化している。都や県教育局のスタッフの人材も不足しており、当会スタッフの作業負担が少なくない。

Ⅳ-2. その他の受託事業

World Vision Laosからの委託で、昨年引き続き、学校図書室に設置する図書と図書室運営用の備品セットおよび本棚を準備する事業を受託し、実施した。

スイスファンドのLao Cultural Challenge Fundの支援により、ブックフェスティバルを実施。本と読書に関する子ども達向けのイベントで、3月から5月かけて、ヴィエンチャン都、ヴィエンチャン県(2カ所)、カムワン県にて、計4回実施した。各地域2日間開催し、4カ所の合計で、のべ134校から7112人が参加しました。2006年に第1回を開催して以来12年間継続していて、近年は地方も積極的で、今年度の4カ所のうち3カ所は初めての開催地だった。

IV-3. 小田原ユネスコ協会

例年に引き続き、小田原市内の小学生とラオスの子ども達の絵日記の交換に協力した。長年にわたり実施してきた本プログラムは、今年度で終了することとなった。

V 国内事業

V-1. 訪問/出前活動

<計画> 「開発教育・国際理解教室」を通して、企業、学校との連携を継続する

<実施>

町田市立真光寺中学校、大田区立大森第六中学校、学習院女子大学へ講師派遣をおこない、プログラムを実施した。その他、大学や企業と、国際理解を深めるイベントを通して連携を強めることができた。 ※10. イベント欄参照

また、文化祭での取り組みや、募金や書き損じハガキの収集で、図書室開設支援をいただいた、「昭和薬科大学附属高等学校・中学校（沖縄）」「福岡県立香住丘高等学校」「愛知県立常滑高等学校」を事務局長、代表やスタッフが訪問し、お礼を申し上げますと共に、取り組みについての取材をおこなった。

V-2. ラオス語絵本プロジェクト

<計画> 既存の翻訳の整備をすすめ、翻訳シートのデジタル化を完了させる

過去実績や人気タイトルを分析した上で、チラシを改訂し、広報を積極的におこなう。また、図書の入れ替えの検討を進める

<実施>

今年度のプログラム参加は、43件(31人・団体)、合計1527冊の絵本が作成された。昨年度に比べ、件数が2倍、冊数は3倍となった。1年間で同じ人や団体から複数回の申込が増えてきていること、団体での取り組みが増えていることが、大幅な増加に結びついた。学校や企業の他、学生団体や自治労など様々な団体からの参加もあった。

昨年から継続して担当インターン1名を配置し、翻訳シートの改訂データ化を進めた。作業は40タイトル分の作業を終え、62%が完了。引き続き完了を目指し作業を続けている。

図書リストの見直しの検討は実施することができなかった。

V-3. 使い残し・書き損じハガキ、未使用切手収集

<計画> 指定募金の一部を使い残し・書き損じハガキ、未使用切手の寄付でも受け付けるようにするなど工夫をおこない、使い残し収集キャンペーンを強化する。

<実施>

1年間で105件、書き損じハガキ4,484枚・未使用ハガキ2,277枚、未使用切手114,200円、計405,137円相当のご支援を頂いた。件数は昨年と同じだが、枚数が昨年より大幅に増し、金額換算で約125%増加している。学校図書室支援のために、3年間かけて3000枚を集めた愛知県立常滑高校など、学校や企業などで取り組んでいただいたものもある。

プレスリリースを積極的におこなった結果、記事が京都新聞、東京新聞に掲載された。また、配付物やフェイスブックなどで積極的に広報した結果、新規の協力者が増える成果に繋がった。

会の運営

I 全体方針

<計画> 市民性を大切にしながら、より専門性をもつNGOとして、安定した活動が継続できるよう事業運営能力をより強化するとともに、計画的な研修によりスタッフの能力強化を図り、組織の運営能力の向上を図る。

寄付者を増やすために、ファンドレイジングの手法により資金調達をすすめる。

東京事務所とラオス事務所との日常的なコミュニケーションを深め、情報の共有化を進める。

<実施>

今年度も引き続き、中期計画にある、運営に関わる重点事項<進捗管理能力><組織運営><資金調達力><人材育成>それぞれの項目で、運営アドバイザーのアドバイスを受けながら、改善を図った。とりわけ、ラオス事務所とのコミュニケーションの強化、情報の共有化、さらに、

ラオス事務所スタッフに対して、事業における計画立案、実施、評価など、PDCAサイクルについて認識を深めるための研修を繰り返すことで、プロジェクトマネジメントについて、ある程度の共通認識を持つことができた。

ファンドレジジングにおいては、SNSなど各種メディアをもちいた広報活動が安定して、展開できたことにより、定期的な募金へのご支援をいただけている。

その一方、ラオス政府との活動覚書 MoUの更新において、政府の方針変更の十分な情報収集ができていなかったことから、作業が大幅に遅れ、MoUが切れている状況での活動を余儀なくされるなど、運営能力がまだ十分で無いことも明らかとなった。

I-1. 理事会

<計画> 活動全版の強化をすすめ、信頼性を高める

経営、資金調達、プロジェクト進行などの状況を把握し、プロジェクトの進捗、成果の確認により、組織運営を管理し運営方針の決定をおこなう。年に3~4回開催する。

各理事には、アドバイスや役割を積極的に担っていただく。

<実施>

以下の9名の理事、監事により運営が担われた。

- 理事
- ・猿田 由貴江
 - ・塩谷 光
 - ・新藤 雅章
 - ・チャンタソン インタヴォン 代表
 - ・野口 朝夫 事務局長
 - ・広瀬 未奈
 - ・森 透
- 監事
- ・矢崎 芽生
 - ・脇田 康司
- アドバイザー
- ・小林毅
- 顧問
- ・長野ヒデ子
 - ・やべみつのり

年4回理事会を開催し、参加者は延べ28名であった。毎回、財政状況、資金調達、プロジェクト運営、MoU更新についての報告、討議のほか、ラオス事務所強化の方策などが話し合われた。

- 第1回 9/2 6名
- 第2回 11/25 5名
- 第3回 4/1 8名
- 第4回 6/24 9名

(上記は、理事監事の出席人数。その他、アドバイザー、スタッフが参加している)理事の理事会への出席率が改善してきている。

I-2. 総会

<実施> 9月16日、2017年度通常総会を活動会員33名(書面表決者11名、委任状9名を含む)、活動協力者7名、計40名が参加し、ライフコミュニティ西馬込で開催した。

第15期事業報告案及び会計報告案が承認された。また、第16期の事業計画、予算が報告された。第二部は、「ラオス語絵本プロジェクト」の体験や、NPOの運営を疑似体験する「NPOゲーム」をおこなった。

I-3. 組織運営

<計画> プロジェクト成果の継続性を重視した事業運営をおこなう。

- ・年間スケジュール計画の精度を高め、それに基づく進捗管理をおこなう
- ・「業務分掌規程」と「職務推進手引き」の整備をすすめ、効率的な働きにより、組織運営を安定化させる
- ・健全な財務体質を構築する
- ・会員及び支援者の継続率を向上させるため、「広報」を、会員および支援者による継続支援のツールとして位置づけ

実施する

- ・具体的な運営は、毎月開くアドバイザーも参加する事務局長、スタッフ会議で決定する
- ・東京事務所、ラオス事務所間のコミュニケーション強化のため、事務局長、所長が参加する月1回の定例ミーティングをおこなう

<実施>

両事務所とも、年間スケジュール計画の精度は徐々に上がってきているが、両事務所間の共有やアップデートなど、進捗管理はまだ充分とはいえない。またともに、「業務分掌規程」と「職務推進手引き」の整備に取り組み始めたが、一部を除き、まとめまで進んでいないという状況が続いている。

会員は、活動会員は13%ほど減少したが（主に学生会員）、賛助会員は10%ほど増加しており、賛助会員の継続率は向上している。また、各種募金による寄付の働きかけ方法の改善により、一般寄付金・指定募金共に金額が増加し、より安定した財務体質への改善が進んだ。

アドバイザーも参加する、事務局長・スタッフの打合せは、合計37回実施され、運営に関する相談と決定をおこなった。

事務局長とラオス事務所所長が参加するミーティングは、不定期での実施となり、コミュニケーションの強化にはつながらなかった。

I-4. プロジェクト運営

<計画> **プロジェクトの質をより高める活動、支援活動をおこなう。**

- ・事業プロジェクトの評価指標を整備し、事業をモニターし、評価を実施する
- ・外務省の日本NGO連携無償資金協力の申請に向けた事業形成をおこない、申請する
- ・現行の国際協力機構(JICA)の草の根技術協力事業が最終年度を迎えることから、事業評価を確実に実施できるようにラオス事務所と協働する。また、次の草の根技術協力事業の申請に向けた事業形成をおこなう
- ・読書環境を充実させる専門性を高めるため、読書推進の専門家・活動家との連携を深める

<実施>

学校図書室の地域への展開事業（草の根技術協力事業）においては、終了時評価の実施にあたり、評価指標を確認・整理し、事業評価を実施することができた。特にラオス事務所と協働し、400人を超える関係者へのインタビューをおこない評価をまとめたことは大きな成果となった。しかし、他の活動においては、評価指標の整備は進められなかった。

外務省の日本NGO連携無償資金協力の申請は、外務省の担当者との面談や、現地大使館担当者との面談、現地調査をすすめ、2018年度の申請に間に合わせる事が出来た。

上記、終了時評価と新規事業の申請を進める中で、また、MoUの手続きを進める中で、草の根技術協力事業のフェーズ2への申請に向けた事業形成は、今年度は見送ることとした。

読書環境を充実させる専門性を高めるための、読書推進の専門家・活動家との連携を深める取り組みは、十分にはできていない。

I-5. 資金調達

<計画> **資金調達力強化を図る。**

これまでの寄付金及び事業補助金を維持しながら、「ファンドレイジング」に基づき、定期的な特別募金(夏&冬)やカレンダー販売を実施。さらに新たな支援者獲得を目指すマンスリーサポーター制度を、各種イベントや広報ツールを通じて広報し、定着させる。そのために、機関紙、年次報告書、ホームページ、ブログ、フェイスブック、メーリングリストなどのコミュニケーションツールの対象(読者)とねらい、担当者、発信/改訂頻度を明確にし、文書化する。

一般寄付・各種募金・マンスリーサポーターなどにより15%の資金調達増を図る。

<実施>

夏募金2017「村の文庫に1600冊の本を届けよう」、冬募金2017「折り紙で子どもたちの学びを豊かに」に取り組み、ニューズレターの特集記事を連動して掲載するなど、資金調達の手法として定着した。達成率は、夏募金は63%、冬募金は66%とどちらも目標額には達しなかったものの、数年ぶりに支援を再開するきっかけとなる方もいた。イベント参加者やカレンダーを購入して下さった方が、ご寄付を下さるなど、新しいご支援者の増加に結びついている。

導入したばかりのマンスリーサポーター制度は、新規支援者へ向けた広報などの取り組みがで

きず、なかなか登録者を増やすことが出来ていない。しかし、一般寄付金や各種募金は、募金やニュースレターなどの呼びかけの成果があり、金額が20%以上増加した。

I-6. 広報

<計画> 寄付者サービスという視点を入れた、広報の充実を図る。

- ・ホームページ、メーリングリスト、メールマガジン、フェイスブック、ツイッターなどデジタルメディアを活用した情報発信により、寄付者、支援者の増加を図る
- ・英文ホームページを整備する
- ・活動内容を分かりやすく伝え、寄付を呼び掛けるリーフレット、パンフレットを刷新する

<実施>

ホームページ、フェイスブックなど、発信は随時おこなっているものの、ホームページリニューアル作業が大幅に遅れている。フェイスブックやインスタグラム、ツイッターは、投稿を増やしたことで、情報発信ツールとして定着するとともに、閲覧者数も増加している。一方で、メールマガジンは見直し作業が進まず、休止したままとなっている。

活動を定期的に報告する「ラオスのこども通信」は以下の通り年3回、計4500部発行。通信送付後には、寄付額はもとより会員更新率も増加している。

70号（8月発行）「村の挑戦！「ラオスのこども」の挑戦！」

71号（2月発行）「折り紙が、子ども達の世界を広げる」

72号（5月発行）「若い力に支えられて」

年次報告書は10月に1500部発刊した。

リーフレットは若干の内容更新をおこなったものを印刷したが、パンフレットは刷新できていない。

II【東京事務所】

II-1. 体制

<計画> スタッフとボランティア、インターンとの連携を高め、業務の効率化と迅速化を図る。

- ・常勤専従スタッフ2名、常勤非専従事務局長1名で運営を担当する
- ・業務分担の適正化を常におこない、業務の質と効率化を図る
- ・ボランティアスタッフの専門性を活かした配置により、業務の幅と質を維持する
- ・ボランティア、インターンに対し、役割、ルールを明確にし、事務所運営やイベント等の担い手として参加を高める

<実施>

東京事務所は以下のメンバーで運営を担当した。

野口朝夫 常勤非専従事務局長 1992年1月入職

赤井朱子 統括、プロジェクト担当 1995年4月入職

五十嵐知恵 国内事業担当 2017年3月入職

年間を通じて、常勤専従スタッフ2名、常勤非専従事務局長1名で運営を担当した。また今年も会計ボランティアスタッフ2名（風間、福島）の継続した協力により、大いに事務局が支えられた。インターンは、昨年度からの継続4名（葉山、伊藤、佐藤、雲田）、新規4名（伏木、佐久間、榎山、南保）合計8名が、事務所業務をサポートした。来られる日数や期間が限定的になってしまう場合もあったが、総合的に事務局の業務態勢を維持することができた。

II-2. 人材育成

<計画> 組織を担うスタッフの能力向上を図る。

人材育成計画を作成し、プロジェクト評価・NGO活動理解・SDGs理解などそれぞれのスタッフに適切な研修を受講させる。

<実施>

東京事務所では、業務に生かすため、以下の研修に参加した。

- ・社会調査法研修（赤井・五十嵐）

II-3. 活動ミーティング・勉強会

<計画> ボランティアの参加を促進する場として、維持する

- ・プロジェクト報告やイベントの打ち合わせなどの他、ラオス語絵本プロジェクトの実施の時間を設けるなどの工夫をして、活動ミーティングを奇数月に開催する
- ・「ラオスを紹介する」「活動内容についての共感を獲得する」場である勉強会は、テーマを設定して、年に数回開催する
- ・活動を紹介し、外部に積極的な呼びかけをおこなう

<実施>

活動ミーティングは以下の日程で実施した。

- 7/15 活動ミーティング 駐在員報告会（参加者15名）
- 11/18 活動ミーティング リコーダー&創作ダンス教室報告、折り紙体験（参加者24名）
- 1/20 活動ミーティング プロジェクト進捗報告 新年会（参加者9名）
- 3/17 活動ミーティング ピーマイ準備会（参加者10名）

当会の基本であるボランティアによる運営参加が、イベントなどに限られてきており、活動ミーティング、勉強会などの強化が必要となっているが、体制が整わず、実施することができていない。

II-4. ネットワーク

<計画> 活動の質の向上と国際社会への貢献のため、他団体、専門家との連携をすすめる。

- ・JANIC、JNNEなどNGOネットワークを維持する
- ・学習院女子大学などの教育機関とインターンや開発教育における連携を継続する
- ・出版の質を上げるために、図書の専門家と連携する
- ・顧問の知見を生かしたアドバイスを受ける

<実施>

国際協力NGOセンター（JANIC）正会員、教育協力NGOネットワーク（JNNE）会員を今年度も継続し、理事の森透がJNNE代表を務めた。

事務局長野口朝夫が学習院女子大学でボランティア関連授業の講師を務め、学生に国際協力の意義を伝えるとともに、事務所やイベントでの実習を継続して引き受けた。また学習院女子大学の開発教育チームと連携して、町田市立真光寺中学校で今年度も開発教育授業をおこなった。

専門性を高めるために、図書館学の専門家下田尊久さんに現地における当会の取り組みを視察いただき、継続してアドバイスをいただけることとなった。

II-5. 事業調整派遣

<実施>

以下の通り事業調整がおこなわれた。

- 9/4-9/7 : 小林毅（学校図書室の地域への展開事業の終了時評価準備のアドバイス）
- 12/17-1/11 : 赤井朱子（学校図書室の地域への展開事業の調整）
- 1/2-1/7 : 小林毅（学校図書室の地域への展開事業の終了時評価のまとめのアドバイス）
- 2/8-2/28 : 赤井朱子（日本人訪問者受入の調整など）
- 2/18-2/21 : 小林毅（中等学校の図書館整備事業に関する事業ワークショップの実施）
- 2/18-2/24 : 野口朝夫（中等学校の図書館整備事業の現場訪問）
- 5/17-5/23 : 小林毅（夏募金取材、事業振り返りと次年度計画ワークショップの実施）

この他、チャンタソンが所用での現地出張の際、ラオス事務所にて会議、調整をおこなった。

II-6. イベント

<計画> 広報の場、ボランティアの活動の場としてイベント参加をおこなう。

- ・ラオス理解、活動理解の促進となるよう、目的、成果を明確にした上で参加する
- ・企業との協働イベント、使い残し・書き損じハガキ、未使用切手の回収などを働きかける

<実施>

この1年、以下のようなイベントを実施・参加した。昨年度に引き続き、資金調達を目的とする織物展を多く開催した。京都での織物展では、京都新聞、毎日新聞に掲載されたおかげで、

多くの来場者を得ることができた。また、ピーマイパーティは、朝日新聞に掲載され、目標の参加者を達成することができた。

*主催事業

7/1	沖電気工業㈱「第18回ラオス語絵本を作ってラオスの子ども達に送ろう！」イベント開催
7/2	2017インターナショナルフェスティバルinカワサキ」に出展
7/22	パルシステム神奈川ゆめコープ「平和・国際フェスタ ハートカフェ2017に出展
9/30-10/1	グローバルフェスタJAPAN2017に出展
10/8-9	よこはま国際フェスタ2017に出展
12/9-10	英国風ティーサロンメイフィールドにて織物展「ラオスの彩り vol.6」開催
2/3	よこはま国際フォーラム出展、報告会の実施
2/20-3/4	ザ・エスノースギャラリーにて織物展「ラオスの手仕事 vol.5～染め 織り 刺繍～」開催
3/14	㈱ニコン ラオス語絵本作りイベント実施
3/20-25	銀座教会ギャラリーエルピスにて織物展「ラオス伝統織物の世界」開催 *
4/15	ピーマイ・パーティ2018開催 *
4/25-30	京都 ギャラリー桜谷町47にて織物展「ラオス伝統織物の世界」開催 *
5/26-27	ラオスフェスティバル2018に出展
6/13-17	英国風ティーサロンメイフィールドにて織物展「ラオスの彩り vol.7」開催

Ⅲ【ラオス事務所】

Ⅲ-1. 体制・運営

<計画> 組織運営体制を確立する。スタッフの自主性、主体性を育成する。

- ・所長以下6名のラオス人スタッフおよび日本人駐在員1名により運営する
- ・NGOとして会の活動理念・意義の共有を、所長が中心になって進める
- ・M○Uの延長および新規締結をすすめるとともに、M○Uに基づき諸官庁との連携を強める
- ・組織運営のための諸規則が着実に実施されるようにする
- ・ラオス人ボランティアを育て、読書推進運動の担い手を増やす

<実施>

この1年間の体制は以下の通りであった。

スラピー	ラオス事務所所長	2006年1月入職	2011年7月から事務所所長
セーン	ラオス事務所所長補佐	2015年1月入職	2018年2月から事務所所長補佐
チャンシー	事務所図書室・図書在庫管理		1998年8月入職
バンロップ	図書館事業、セミナー講師補助		2013年7月入職
スパン	セミナー講師補助、図書室活動		2014年12月入職
スパポーン	事務・会計補助		2014年12月入職
政岡史織	日本人駐在員	2015年9月入職2018年1月退職	2015年11月ラオス事務所赴任
ダラー	顧問	2005年4月入職 (2011年7月現地代表から顧問へ)	
他	夜間ガードマン	1名	

現行のM○Uが2016年11月で切れ、更更新続が大幅に遅れたことから、カウンターパート側と話し合い、2016年11月までのM○Uを2018年1月まで延長する手続きをおこなうことで合意した。

しかし、その延長手続きについて書類準備の遅れや、カウンターパートの担当者との行き違いがあり、さらには、最終段階で、カウンターパートである教育スポーツ省が大きな組織改編をおこなったことなどにより更に手続きが遅れることとなった。最終的には、期限のある草の根技術協力事業の終了時評価の活動の実施の許可を得て、活動を修了させることができた。しかし、その後、新規締結に向けて準備を進めるものの、年度内に締結することはできなかった。

今年度は、JICAと共同して取り組んできた「学校図書室の地域へ展開事業」の評価活動に、ラオス事務所を挙げて取り組んだことで、スタッフがプロジェクトの全体象の把握がすすみ、プロジェクトの総合的理解ができるようになった。さらに、今期事業評価、次年度計画などをラオス事務所としておこない、集約した意見を会の活動評価、年次計画に反映さ

せることができた。

事務所の運営管理については、諸規則の素案が作成されているが、ラオススタッフとの調整ができず、今年度も本格的な導入に至っていない。

また、ラオス人ボランティアを育てる活動は、積極的な活動はできていないが、奨学金事業で受給を受けた学生が、大学に進学し、ボランティアとして、時折、事務所を手伝ってくれることがあるなど、少しずつ、担い手を増やす活動をしている。

Ⅲ-2. 組織運営

<計画> 安定した継続的な組織運営をおこなうために、運営マニュアルの整備を進める。

- ・所長による業務報告文書の作成を徹底させる
- ・手順書(職務推進マニュアル)の整理を進め、一部の試行を始める
- ・業務分掌規程の整備を進める(保留されていた諸規定類を、ラオスの新労働法を踏まえて完成させる)

<実施>

東京へ提出する業務報告文書は8月頃より試行し、遅れがちであるが、徐々に期日通りに提出されるようになってきた。日本人駐在が帰国後は、所長補佐という役割を作り、所長の業務をサポートする体制を作った。

手順書の整理および業務分掌規程の整備は進めることができなかった。

Ⅲ-3. プロジェクト運営

<計画> 「読書推進」「出版」「子どもセンター」の主要3事業の成果継続を優先する。

- ・確実なプロジェクト運営をおこなう
- ・子どもたち、裨益者の様子、ニーズの把握を常におこなう
- ・プロジェクト成果・問題点を常にスタッフ間および東京事務所と共有する

<実施>

ラオスで実施しているプロジェクト全体を、年間スケジュール表に入れて全体調整をおこなう管理のやり方は少しずつ定着してきているが、カウンターパートの都合によるスケジュール変更が頻繁に起きるなど、現場での調整に困難がある。確実なプロジェクト運営を進めるためには、常に数ヶ月先の動きも把握する必要がある。今後ともスケジュール管理に力を入れていく。

活動地を訪問する際に、子どもたち、教員、地域住民に聞き取り調査をおこなうようにしているが、ニーズ把握と共有をより進めていく必要がある。

プロジェクト成果・問題点の共有は、十分な状況ではなく、改善していく必要がある。

Ⅲ-4. 進捗管理能力

<計画> 主要3事業の評価指標を整備し、事業をモニターし、評価を実施する。

- ・各業務ごとに、その都度実施報告書を作成することを徹底する
- ・業務実施報告書をもとに、プロジェクトごとの工数を算出し直す
- ・事務所全体の年間スケジュール表に従った運営、管理を徹底する(スケジュール作成において、出張日のみならず、準備、振り返りなど付帯する業務日を確保する)
- ・JICA事業の終了時評価を実施する

<実施>

出張毎に、各スタッフが実施報告書を作成。必要に応じて、報告書を東京事務所に提出する体制もできてきた。しかし報告が遅れがちになる為、更なる改善が必要。

プロジェクト全体を年間スケジュール表で管理する体制は少しずつ定着してきている。ただ、スケジュール変更があった際の情報が遅れることがあり、今後も改善を加えながら、スケジュール管理に力を入れてゆく。

Ⅲ-5. 資金調達力

<計画> ラオスでの資金調達を促進する。

- ・<図書の販売> 販売実績のデータを整理し販売戦略をたて、図書委託販売先を20カ所に増やす
ニーズ調査を踏まえ、販売できる本を出版する
- ・<受託事業> 奨学金の受託事業は継続する。さらに、企業、外国政府、国際機関、国際協力NGOに対し資金調達を意

識したプロジェクトを働きかける。

- ・プロジェクト受託のための見積、契約内容の精度を高める
- ・資金調達につながるイベント、プロジェクトを企画し、他団体との連携を強化する
- ・奨学金事業の業務を共同できる教育局スタッフを増やす

<実施>

図書の販売：

図書の委託販売先の拡大については、担当者が積極的に取り組み、委託販売先は5か所増え、20か所となった。委託先の本の販売冊数と金額は増加している。

また、昨年に引き続き、国際NGOが当会出版図書のまとまった購入もある。World Vision Laosからの受託事業は継続しており、図書室用の図書と運営に必要な備品をセットの依頼が今年も継続した。(専門の書店や卸業者がないラオスでは、必要な図書を集めて箱詰めする作業にも人手が必要)。

受託事業：

タイのThe Siam Cement Public Co., Ltd. (SCG)から受託している奨学金事業は継続した。

また、スイスファンドのLao Cultural Challenge Fundの支援による事業(ブックフェスティバル)も継続した。

プロジェクト受託のための見積、契約内容の精度を高める取り組みは十分でない。

Ⅲ-6. 人材育成

<計画> **事業と組織を担うスタッフの能力向上を図る。**

- ・人材育成計画を作成し、スタッフが出版の編集、レイアウト研修を受ける
- ・スタッフが図書販売管理の研修を受ける
- ・スタッフがコミュニケーションスキルの研修を受ける
- ・事務局長が組織運営マネジメント研修を受ける
- ・活動の歴史、団体、NGO活動を知るための研修をおこなう

<実施>

日常業務に追われる中、研修のタイミングを調整することが難しく、各種研修の必要性を感じつつも、十分な計画の作成と実行ができていない。

事業評価や立案に合わせて、アドバイザーによるワークショップを繰り返し実施することで、スタッフの能力強化がおこなえた。

Ⅲ-7. 広報

<計画> **発信力をあげる。**

- ・出版研修の成果(実地研修)として、ニュースレターを復刊する
- ・活動やラオスの教育事情に関する情報発信を強化し、日本社会及びラオス社会での団体認知度を上げ、寄付者を増やす。

<実施>

ニュースレターの復刊は実行できなかった。

活動の情報発信は主にフェイスブックを使っておこなっており、ラオス社会での団体の認知度は上がってきている、しかし日本社会での認知度を上げる情報発信は十分ではない。

Ⅲ-8. ネットワーク

<計画> **組織運営、事業展開の効果を高めるため、ネットワークを維持する。**

- ・ラオス政府、教育NGOとの連携を維持する
- ・他団体などとの連携により、当会の認知を広める
- ・スタッフの業務意識向上のため、ネットワークを活用した研修をおこなう

<実施>

MoU締結準備にあたり、ラオス政府が発する情報や、地方行政との調整などで、十分では無いところが見受けられた。今後は、情報収集に注意深くなる必要がある。教育NGOとの連携を維持し、事業を実施した。

他団体との連携により当会の認知を広める活動は実施できていない。

ネットワークを活用した研修は模索したが、こちらの目的に適合する団体を見つけられず実施できていない。

Ⅲ-9. インターン・ボランティア

- ＜計画＞ ・併設の図書館や学校などで図書活動を担う人材として、ラオス人ボランティアを育成する
・日本人のインターン・ボランティアを受け入れ、活動に関心のある人材にラオスでの活動協力の機会を設ける

＜実施＞

ラオス大学の学生のボランティアは、定期的ではないが、継続的に実施されている。毎年恒例の日本人大学生のボランティアによる「リコーダー&ダンス教室」を実施受入した。また、5月より、ヴィエンチャン在住の日本人学生が、図書館のアクティビティを実施しに来訪するようになった。

Ⅲ-10. 訪問受け入れ

- ＜計画＞ 活動理解の場として受け入れ、寄付者、支援者の増加に結びつける。
- ・会員、国際理解・開発教育スタディーツアー、高校・大学海外研修、学生ボランティア団体、NGO団体・個人訪問など、ラオス事務所及び併設図書館の訪問を受け入れる
 - ・寄付者、活動の理解者、支援者を増やすために、旅行会社が企画した各種スタディーツアーの受け入れをおこない、必要に応じプログラムの提案等、広報もおこなう

＜実施＞

この1年、以下のように参加・受入、イベント実施をおこなった。

8/13-27	日本から大学生ボランティア 7名受入「リコーダー&創作ダンス教室」実施
8/11	ご支援者4名来訪
8/27	松濤幼稚園関係者8名来訪
8/29	Infinite Connection 5名来訪
9/1	奈良女子大学ツアー7名 訪問受入
9/6	学習院女子大学国際協力研修23名 訪問受入
9/18	神戸大学1名、東洋大学Smile F LAOS 4名来訪
9/21	日立造船㈱ラオス環境啓発事業関係者5名 来訪
12/7	天皇誕生日レセプション 参加
1/9-11	ラオスの子どもとつながる会 5名 図書室開設訪問受入(ヴィエンチャン県)
2/13	千葉港ロータリークラブ図書贈呈式 5名 訪問受入調整(ヴィエンチャン都)
2/21-25	四天王寺大学プログラム 18名 受入(ヴィエンチャン都)
3/19	北海道大学4名 関西学院大学3名 訪問受入
3/27	茗溪学園高等学校 訪問受入
5/9	在住日本人ボランティア 来訪
6/1	こどもの日イベント参加(ヴィエンチャン子ども教育開発センター)
6/28	パクライ子どもセンタースタッフ2名子ども11名 来訪
6/30	PPPL主催「サンシンサイ」イベントに参加 ※地名の記載のない訪問受入は全て事務所